

Is This a Japanese One?: Japanese and Foreign Culture —多面的・多角的な考え方で捉え、未来のために今を見つめる子ども—

鬼頭 美樹* 建内 高昭**

*附属岡崎中学校

**外国語教育講座

Is This a Japanese One?: Japanese and Foreign Culture – Fostering students who stare the moment for the future through multifaceted ways of thinking –

Miki KITO*, and Takaaki Takeuchi**

*Okazaki Junior High School Affiliated to Aichi University of Education, Okazaki 444-0864, Japan

**Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Keywords: 多面的・多角的な考え方 Multi Filter Sheet

I はじめに

新しいものや方法、価値観が次々と生まれる現代。周囲と足並みをそろえ、いまある当たり前を常識として生活しているだけでは、変化に飲み込まれてしまう。新しいものは、これまでにあるものに対して、不足を補うこと、新たに組み合わせること、不要なものを排除すること、対極にあるものを掛け合わせることなどから生まれることが多い。世界的な共生やめまぐるしい変化が当たり前の現代社会において、身近にある当たり前を常識として成り立たせている価値観や、違和感をおぼえる要因について認知し、活用するために考え抜く力が必要となる。その力を磨くためには、自分の経験だけに基づいた感情や思い、考えだけでなく、さまざまな視点をもつことが必要である。

視点の多さは、その人自身が見通せる可能性の多さにつながると考える。自分自身が見ている範囲でしか行動することができないと言い換えることができる。なにを考えるべきなのかという問題自体も、自分自身の視点が大きく影響してくる。視点を増やし、見通せる可能性を広げることで、考え、行動する幅

を広げられる。新たな視点を獲得することで、めまぐるしい変化の中に問題解決の糸口を見いだしたり、新たなものを生みだしたりすることができ、将来の躍動する姿に結びつくはずである。さまざまな視点で捉えることで、自分の経験や価値観だけでつくり上げている考えだけで判断せず、柔軟に価値観を認め、物事に自分なりの目的を見いだせるように、今を見つめる子どもたちを育成したい。

II 主題設定の理由

新年度が始まり、本学級では新入生歓迎会に向けて準備が始まった。具体的な内容や役割分担が短時間で決まり、準備も順調に進んだ。しかし、それぞれの役割が日頃から付き合いやすい仲間で構成されており、導いてくれる存在に従って行動していて、必ずしも個々の考えや特性が反映されているわけではない印象を受けた。学級編成がないため、これまでに培ってきた関係性が安心する場であり、中心となる子どもの考えに影響を受けやすい環境であると感じた。一度身につけた考えや価値観に対して疑うことなく、そのまま受け入れている姿勢が課題であると考えた。

また、追究をとおした学びを行動につなげることを目指しているが、単元によって難しさがあると感じた。難しさを感じる理由は、子どもたちが追究する問題にあると考える。単元で設定される問題が目的を含んでいる場合は、子どもたちの問題に対する答えが行動につながりやすい。しかし、文化や社会生活の違いから生みだされる問題を解き明かす場合は、違いを知ることが目的となるため、学びを生かす場面で、行動に移すに至らないのではないかと感じた。しかし、これらの問題は、今を生きるうえで考える意義は大きいはずである。この現状から、一つの事象について考え、導いた結論を、他の事象と関連づけ、生活に生かす思考が必要だと考えた。

学級の様子と本校の研究について考えたときに、自己考察の充実が重要であると考えた。自分の考えや思いをさまざまな視点から導くことができれば、広い視野でものごとを捉えることができる。自分で調べたことや取材をとおして気づいたことと、他者の学びやフィードバックを比較したり、共通点を見つけたりすることで、普遍的な価値を見つけることができる。そして、見いだした価値を生かす目的や対象を考えられるようになれば、周囲の意見に流されずに、自分の意見をもち、自分の意思で行動することにつながる。そのように目の前の事象を理解する経験を重ねることで、将来相手や状況が変わっても、大切にされる価値を生活に取り入れることができると考えた。

そこで、主題を「多面的・多角的な考え方で捉え、未来のために今を見つめる子ども」として、研究を進めていくこととした。

Ⅲ 研究の構想

1 目ざす子どもの姿

多角的・多面的な考え方で捉え、未来のために今を見つめる子ども

2 研究の仮説

自分の考えに対する他者からの意見を問い直す活動をしたり、目の前の複数の事象から共通する価値を見いだす機会を設定したりすれば、多面的・多角的な考え方で捉え、今を見つめることができるだろう。

・「多面的・多角的な考え方で捉える」のとらえ

他者からの意見を問い直し、新たな考えを構築する姿

・「今を見つめる」のとらえ

自分の生活に具体的に結びつける姿

3 仮説を検証するためのてだてと検証方法

【てだて1】他者からの意見を問い直し、自分の考えを見いだすワークシート (Multi Filter Sheet) の工夫

調べたことや他者から聞いた考えをもとに、自分の考えを構築する際に考える視点は、自分の内部にあるものに頼ることが多い。つまり、いくら調べた事実や他者の考えがあったとしても、自分が潜在的に構築した価値観をもとに考えを生み出しているため、多面的・多角的な視点でとらえているとはいいにくいと考える。そこで、子どもが調べた事柄や、他者からのフィードバックをもとに自己考察する場面で、他者の意見を問い直す場を設定する。

他者の意見を問い直すことで、簡単に自分の考えと似た考えを取り入れたり、真逆の意見に流されたりせずに、自分にはない視点までも見つめ直したうえで考えを導き出し、多面的・多角的な考え方で捉えることにつながるのではないかと考えた。

【検証方法】

自己考察する場面の注目生徒の学びの変容を分析する

(自己考察後の発言の内容、授業日記、教師との対話)

【てだて2】目の前にある複数の事象から共通する価値を見いだす機会 (My Action Time) の設定

子どもたちは意見交流をとおして共有した考えをもとに最適解を導き出し、自分なりの行動を考える。ここで、自分の考えと、自分の考えのもととなった他者の考えから導き出した共通する価値を改めて考えられるようにする。複数の事象に共通する価値は、自分だけでなく、他者や将来にとっても受け入れられるものになると考える。見つけ出した価値を、誰のために、どんな目的をもって自分の生活で生かせるかを問い直すことで、生活の中で生かす姿につながるはずである。

【検証方法】

自己考察する場面の注目生徒の考えの変容を分析する
(発言の内容、授業記録、単元まとめへの記述、教師との対話)

Ⅳ 注目生徒について

本研究を行うにあたって、生徒1を注目生徒として、その変容を追う。生徒1は、学級活動や行事に向けた準備活動において、自分の意見をもつことができる。朗らかな性格で、他者とも前向きに関わることができる。しかし、自分の意見があっても、他者の意見が優位にあると判断すると、他者の考えに合わせて行動する姿が見られる。学級目標を話し合う場面では、周囲の話し合いが一つの目標に向かっていく様子を感じ取り、自分の意見を伝えようとしなかった。また、新入生歓迎会で行う授業紹介の準備においても、友達が作成した台本をそのまま受け入れ、練習方法や役割分担も他の友達が指示するように行動していた。

本研究では、自分の考えに対する他者の意見を見つめ直すことで、多面的・多角的な考え方で捉え、他者の考えに流されることなく自分の考えを表出する姿を期待している。また、複数の事象から普遍的な価値を見つけ、自分の現状にどのように生かせるかを考え抜き、行動につなげる姿を願っている。

V 検証（てだての有効性）

自分の考えに対する他者からの意見を問い直す活動（てだて①）をしたり、目の前の複数の事象から共通する価値を見出す機会を設定（てだて②）したりすれば、多面的・多角的な考え方で捉え、今を見つめることができる（目ざす子どもの姿）だろう

1 【てだて1】 Multi Filter Sheetの有効性

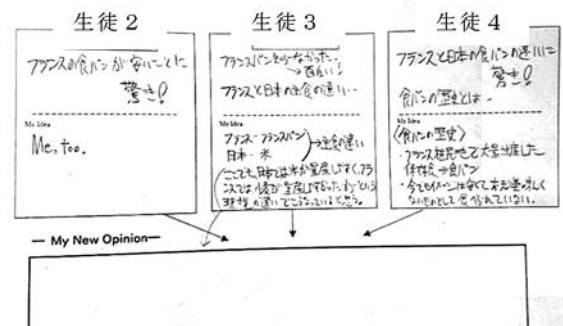
● 5月25日（木）第6時

外国人に日本のどのようなものが食べられているのだろうかという実態調査をもとに、意見交流を行った。事前に配布したCompilation Bookにある実態調査の内容とMy Opinionに対して生徒1はグループの仲間からフィードバックをもらった。そして、フィードバックをもとに他者の意見を問い直し、自分の新しい考えをもつ場とした。

資料1：Compilation Bookにまとめた生徒1の意見

I think there are many food cultures in foreign countries, so the food not eaten aren't little popular. Japan is cleaner than other countries and Japanese food is so delicious.

資料2：Multi Filter Sheet



資料3：授業後の対話記録

教師：My New Opinionが書けていないが、どうだったのか。

生徒1：みんなからいろいろ言ってもらった。生徒2は、①自分が実態調査をしてCompilation Bookに書いた内容に対して、同じように驚いたことを伝えてくれた。自分だけではなく、ほかの人も同じように驚くことはわかった。でも、みんなも同じだと思えることはあっても、さらに考えることはなかった。生徒2と生徒3も、フランスと日本の主食の違いや歴史に関わる意見だった。②実態調査の中で調べてあったことだったから、その質問に対する答えはすぐに書けた。③My New OpinionのNewとなると、自分の調べたことと考えたこと以上に新しいものが出てこなかったもので、空欄になった。

【考察1】

生徒1は、他者からフィードバックをもらい、他者からの意見を問い直したが、資料2の“My New Opinion”は空欄のままであった。ワークシートからは、生徒1が新たな考えを見いだしたと判断することはできない。授業後に対話を行った。資料3①から、実態調査の内容に対する驚きや同意といった感想をもらうだけでは、考え直す機会にはならなかったことがわかる。また、資料3②の言葉から、実態調査の内容に直接関係することを問われたとしても、精選したうえでCompilation Bookに記入しなかった内容を聞かれている場合は、生徒1の思考を深めるきっかけにならないことが明確になった。他者の考えを問い直し、自分の考えをもつためには、フィードバックのタイミングと質が影響する。また、資料3③にあるように、新たな考えをもたなければいけないこと思い込んでいたことも、新たな考えを記せない理由になっていた。他者の意見が、自分の考えを支える根拠になる場合は、自分の考えを無理にかえる必要がないことを共有すべきであった。この場面においては、他者の意見を問い直す必要性がなかったといえる。つまり、簡単に自分の考えと似た考え方を取り入れたり、真逆の意見に流されたりせずに、自分にはない視点までも見つめ直したうえで考えを導きだすことができ、多面的・多角的な考え方で捉えることにつながったとはいえない。

●5月31日（水）第8時

「どうして外国にルーツをもつものが日本のものとして外国人に受け入れられるのだろうか」という問題に対して、外国人の考えを知るために、カレー屋の主人に取材をした。

資料4：Multi Filter Sheet

→

A

His / Her Answer

日本⇒甘い、米に合う
インド⇒スパイス、辛い
刺激の 玉ねぎ、中国
イタリヤ、インド、
健康の スパイス、
・ヨーロッパ⇒甘い、
・東南アジア⇒辛い

日本はもともと甘い料理が好き
・日本の料理、おいしい（生食もおいしい）
・特に米とカレー
・インドも日本に行くと、インドに慣れた、
日本食もたべている

B

Reflection

Japanese curry is sweet. Indian curry is spicy.
Japan curry is No.1 traditional food to eat because
Europeans prefer sweet over spicy.

資料5：授業後の対話記録

教 師：取材を終えて、どうだったか。

生徒1：教えてもらったのは、①日本のとインドのカレーの辛さの違いだった。インドはスパイスが効いていて、刺激が強い。辛さがある。国によってカレーに違いがあるが、日本は甘めに仕上っている。

教 師：辛さの違いが、日本のものとして受け入れられることに至ったということか。

生徒1：そうです。ヨーロッパと、東南アジアの人では、好みの味が違うと聞いた。前に、②生徒4が言っていたランキングはヨーロッパのものだった。だから、日本のカレーを受け入れている外国人というのは、ヨーロッパの人を表していると考えた。ご主人が話していたヨーロッパの人は甘めを好むという言葉から、日本のカレーは甘いから、インドのカレーとは別で、日本のものとして考えられているのだと思った。

教 師：ここ（米に合う、ナンに合う）はどう考えたのか。

生徒1：③もともとインド人はカレーをナンと食べる。日本は主食が米だから、米に合うように作っているというだけ。

教 師：右側はなにか。

生徒1：④カレーとは関係ないけど、教えてくれた内容です。

【考察2】

資料4では「日本のカレーは甘い。味わうべき伝統料理1位になったのは、日本のカレーの甘さがヨーロッパの人に好まれているからだ」と結論づけている。これは、資料5①にあるように、取材で外国人に聞いた日本の特徴であるカレーの甘さを根拠として述べている。また、資料5②にあるように、取材をとおして知った内容を、問題「どうして外国にルーツをもつものが日本のものとして外国人に受け入れられているのか」のきっかけとなったランキングと照らし合わせて問い直しを行っていることがわかる。取材結果を問い直すことで、問題につながっているかを考えたことがわかる。しかし、資料5③にある

資料10：授業後の対話記録

教師：フィードバックを受けて、どのような考えになったか。

生徒1：班の子から、地域ごとに好む味が違うという考えは同じ考えだと言われた。自分が取材で聞いたことと、違う人が別の取材相手に言われたことが同じだと、納得したし、おもしろかった。

①何に合わせて食べるかという部分を生徒6に指摘されて、他の人にはない視点だったことに気づいた。あまりそこは大事に考えていなかったけれど、日本のものとして受け入れられている理由の一つになると感じた。ALTからは、“fusion”という言葉を教えてもらった。②日本人は“fusion”が上手だと言っていた。いいところを組み合わせるみたいな感じだと思う。それは、生徒6の何と合わせるかを大切にしているところともつながると思う。

【考察4】

生徒1は、これまでの調べ学習や取材をとおして、さまざまな味や食べ方の工夫という視点で考えを構築していた。その2つの視点から、資料8①「Even if Japanese is not original, it is accepted as a growth of each. Every country improves the taste of food day by day.」という改良に注目した考えを導きだし、Compilation Bookにまとめていた。しかし、他者からのフィードバックを受け、問い直した（資料9ア）ことで、資料10①「あまりそこは大事に考えていなかったけれど…理由の一つになると感じた」にあるように、取材で聞いたが考えに取り入れていなかった「食べ物の組み合わせ」という視点から自分の考えを再考していることが読みとれる。また、資料9イにあるように、ALTから“fusion”というフィードバックを受けている。このALTからのフィードバックを問い直したことで、資料9イにある「カレー+米→日本」という、これまで取材で聞いたことや生徒6からのフィードバックとつなげて、外国の食べ物と日本の食べ物を組み合わせることが日本のものとして受け入れられる理由であるという考えを生みだしている。加えて、資料9イ「パン+シチュエーション→日本」のように、取材結果とフィードバックをつなげて、外国の食べ物と場面に応じて食べ方を変える日本人の工

夫が組み合わせることで日本のものとして受け入れられる理由につながったと結論づけていることが見取れる。また、資料10②「生徒6の何と合わせるかを大切にしているところともつながる」にもあるように、自分の考えてきたことと複数の他者の考えを織り交ぜて自分の新しい考えを構築しているといえる。よって、子どもが調べた事柄や、自分の考えに対する他者からのフィードバックをもとに自己考察する場面で、他者の意見を問い直すことで、簡単に自分の考えと似た考え方を取り入れたり、真逆の意見に流されたりせずに、自分にはない視点までも見つめ直したうえで考えを導きだすことができ、多面的・多角的な考え方で捉えることにつながったといえる。

【結果】

てだて1は、一部有効であった。

他者からの意見をすべて問い直すことで、自分がもっていた考えに近いものだけでなく、これまでになく考えや情報から自分の考えを再考することができた。言い換えると、自分自身の認識の有無にかかわらず、どの考えにも思考をめぐらし、自分の考えの構築に役立てることができた。しかし、フィードバックのタイミングと質には課題が残る。実態調査をとおしてもった意見に対しては、フィードバックを与える側が同意を示したり、疑問を投げかけたりすることしかできなかった。また、どのようなフィードバックを与えると相手の思考を深めることができるのかを子ども自身が学ぶ必要がある。

2 【てだて2】 My Action Timeの有効性

●6月20日（火）第12時

Compilation Bookをもとに意見交流を行い、「ものづくりをするうえでの、目的や対象を思いやり妥協しない日本人の姿勢こそ、外国人に受け入れられている」という考えを共有した。共有した考えをもとに、最適解を導きだし、志がうまれた。

資料11：生徒1の志

今ある日本の技術を未来に受け継いでいて、その過程でさらに改良を重ねていくことを大事にしていきたい。

● 6月21日（水）第13時

生み出した志を生活の中で生かす姿につながるために、My Action Timeで問い直しを行った。

資料12：授業後の対話記録

教 師：どんなことを考えたのか。（ア）

生徒1：日本には強みがあることがわかった。日本で長く大切にされている和食自体や、シンプルさや食べやすさ、もちろん加工のうまさといった強みを未来に受け継いでいきたい。①さらにそれを進化させていて、日本はもちろん、海外でも愛されるようなものにしたい。②少なくとも、自分の周りにいる外国人には日本を好きになってもらいたい。

教 師：それは誰のために行うのか。

生徒1：外国人に働きかけたい。日本を知ってもらうことで、日本への興味が深まったり、日本人を受け入れようとしたりすると思う。外国人に向けて行くけど、日本人とか、自分のためにもなっていく気がする。

教 師：それで、どうするのか。（イ）

生徒1：英語をもっと話せるようにする。コミュニケーション力をつけないと、伝えたいことも伝えられない。③勉強する中で知り合う外国人に日本食を紹介したい。実際に作って一緒に食べることで、日本食に込められた日本のよさも一緒に伝えたい。

【考察5】

生徒1は、資料11にあるように、改良を重ねていくという日本人の気質が外国人に評価されていることを認識している。しかし、自分の生活に結びつけているというよりは、漠然と理想論を記述しているだけに読み取れる。My Action Timeにおいて問い直し（資料12ア）を行うと、資料12①「愛されるようなものにしたい」にあるように、広範囲で考えていることがわかる。しかし、資料12②では、自分の周りにいる人から伝えていきたいと述べており、自分の生活範囲の中でも考えていることがわかる。現状では、生徒1に身近な外国人はいないため、いまの生活において生かされる可能性は低い。また、問い直し（資料12イ）を行うと、資料12③にあるように今後出会う外国人に対して行動していきたいという

気持ちが読み取れる。今回の学びを現時点で行動に移そうとするわけではなく、いつかそのようなときがきたら行動できる人でありたいと考えている段階でとどまっている。よって、見つけ出した価値を、誰のために、どんな目的をもって自分の生活で生かすことができるかを問い直すことで、生活の中で生かす姿につなげることができたとはいきれない。

【結果】

有効ではなかった。

My Action Timeを行うことで、目的や行動は明確になり、生活につなげやすくなる可能性はある。しかし、そもそもの熱意がなければ、どれだけ言葉が明確になったとしても、切実感がない。問題から生まれた最適解をもとに、状況を理解し、それに応じた理想の言葉を述べている段階にすぎなかった。

Ⅵ まとめ**資料13：生徒1の単元まとめ**

Compilation Bookのあとに、①みんなから意見をもったことで、他の人たちが取材をとおして同じようなことを教えてもらっていることがわかった。アレンジとか、A L Tの言っていた“fusion”みたいに、日本は掛け合わせることを得意としている。あるものを変化させていくことは、どの国にも言えることだと思っていたけれど、日本は特にその特徴があるということがわかった。取材相手の出身地が違って、同じ内容が出てくるということは、日本のものが外国人に受け入れられる理由として、信用できると思う。日本はもともと島国だから資源が限られているので、あるものを大事に扱うことや、どうやって活用するかを考え抜く性格みたいなものが身についていると感じた。それは生徒7も同じ考えをもっていた。そういうところは大切に受け継いでいきたい。それと、②いろんな人の意見について考えることで、関係ないと思っていたことが、実は考えていた内容と関係していることにも気づけておもしろかった。

英語は得意ではないけれど、外国のかたと話すのはおもしろかった。③いつか外国のかたに日本食のおいしさを伝えながら、日本のよさも伝えていきたい。

生徒1の単元まとめの資料13①からは、他者の考えを問い直すことで、他者の考えや取材内容、自分が受け取ったフィードバックの内容から共通することを見いだしていたことがわかる。そして、それを根拠として自分の考えに加え、自分の考えを再考した様子が見

取れる。そして、資料13②からは、考えの構築に無関係だと判断していた事実を、他の事実と結びつけて考える意義に気づいたことがわかる。前述したように、他者からのフィードバックの質やタイミングは最適だったとはいえない。しかし、他者の意見すべてを問い直すことで、簡単に自分の考えと似た考えを取り入れたり、真逆の意見に流されたりせずに、自分にはない視点までも見つめ直したうえで考えを導き出し、多面的・多角的な考え方で捉えることにつながったといえる。この点においては、仮説の妥当性がみられる。しかし、資料13③からは、単元から導き出した思ひは、生徒1の身近な生活に結びついていないことがわかる。目的や対象に目を向けることで生活に結びつけようとしている姿は見取れるが、現状でどのように生かせるかまで考え抜くことは難しかった。てだて2における今を見つめる姿に結びつけることはできなかったといえる。よって、本研究の仮説は限定的に妥当だったと考える。

Ⅶ おわりに

本実践で講じた他者からの意見を問い直すことは、注目生徒にとって複数の事象から新たな考えを構築することにつながった。しかし、注目生徒の姿をとおして再確認したことがある。一つ目は、他者のフィードバックの質とタイミングによって、考えを深める効果が変わることである。また、二つ目に、ワークシートとして活用しなくても、日頃から問い直しを習慣化することが可能であるということである。一つ目のフィードバックについては、グループで行うため、子ども自身が知りたい内容をもった相手や、質問したい相手を含んで班編制を行っている。しかし、グループとして機能するように編成を行うと、必ずしも本人に効果的なフィードバックばかりにはならない。一人一人のフィードバックの質を上げることが必要不可欠である。フィード

バックをもらう前には、Compilation Bookに取材結果や考えをまとめている。それを読み込んだのちに対話型でフィードバックを行うことで考えの根拠が伝わりやすくなり、フィードバックの質を向上させることにつながるかと考える。また、フィードバックの視点を示すことで、質を向上させることができるはずである。フィードバックを与えることの意義を子どもが理解し、フィードバックの視点を極めることができれば、他者の考えに対しても、自分自身の考えに対しても考え抜き、行動する幅を広げられると考える。これからも、子どもたちが他者の考えを問い直す習慣を身につけ、多面的・多角的な視点で考えるように支援していきたい。

ものごとに共通する価値を見つけ、生活にどのように生かすかを考えることについては、どのようなてだてが有効に働くのかを今後も考えていきたい。単元で学んだことが、場面や形がかわっても生かせるようにする方法は、今回のように直接的に引き出さなくても可能なのである。今後も学びを追究することそのものを身に付けられるような実践を積み重ねていきたい。

参考文献

- 文部科学省（2018）『中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 外国語』 東京：開隆堂
- 江島徹郎（代表）（2023）「躍動－志をもって歩み続ける子ども－」研究のあゆみ3、愛知教育大学附属岡崎中学校